

Andrey Brelow

日本人

アンドレイ・ピロフ(ヴァイオリン)

1981年ウクライナ生まれのアンドレイ・ピロフは、ウクライナを代表する音家の一人名となっている。ソリストとして、またシマノフスキ弦四重奏のリダとして、ナクソス、CPO、Avi Music、ヘンストラ、Guttingi、Solo Musica、Genuin、そしてハイペリオンに音している。

ソリストとして、ピロフは新日本フィルハーモニー交響、フランス立放送フィルハーモニー管弦、ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー管弦、バイエルン放送交響、アマデウス室管弦、キエフ立フィルハーモニー交響、ミュンヘン室管弦などの著名なオーケストラと協演。協演した指揮者には、クルト・マズア、ヤン・パスカル・トルトゥリエ、ジャン・ドレ・ノセダ、ミゲル・アングエル・ゴメス・マルティネス、クリスチャン・アルミンク、アニエスカ・ドゥチマル、上淳一、クリストフ・ポッペン、エンリケ・マツォラらがいる。

30曲を超える協奏曲、主要なヴァイオリンソナタがソリストとしてのレパートリーである。ピロフは最近では、南西ドイツ放送交響とショスタコヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番を、またイギリスのライデル音祭では、チャイコフスキのヴァイオリン協奏曲をマルティン・アンドレの指揮で演奏した。また、2009年にはウィグモアホールで、ロンドンでのリサイタルデビューを成功させ、2012年10月には同じロンドンのカドガンホールで、マルコム・アーノルド作曲の2つのヴァイオリンのための協奏曲を演奏した。

ピロフは5歳のときに初めてヴァイオリンのレッスンを受け、1993年、キエフにある全寮制の音楽校に入った。彼の才能に気づいたミハイル・クズネツォフ教授は、11時だった少年を自宅に招き、さらなる音楽教育を施した。ピロフは早くからヨーロッパやアメリカでの選された演奏に出演するようになった。

15歳のとき、ピロフはドイツに移り、ハノーファー音楽演劇大のクシットフ・ヴェグジン教授のもとで学ぶようになった。さらに、パリではジェラルド・プレ、ヘルマン・クレバツァス、イダ・ヘンデル、アナ・チュマチェンコ、アルフレート・ブレンデルらに師事をした。

アンドレイ・ピロフは、パリのロン＝ティボ国際コンクール、ミュンヘン国際音楽コンクール、ハノーファー国際ヴァイオリンコンクール、ブレスシア国際ヴァイオリンコンクールなどで上位入賞を果たしている。特筆すべき音楽的才能により、これまでの多くの賞金を得た。

これまで、特に室内分野に力を入れてきており、活躍も著である。シュレ＝スヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭、ルールのピアノフェスティバル、ラインガウ音楽祭、クフモ室音楽祭、ベルリンヤングユークラシック音楽祭、シュベルティアデ音楽祭、ライデル音楽祭、マカオ国際音楽祭などに出演している。

2005年にはシマノフスキ弦四重奏にリダとして加わった。また、クロンベルクアカデミーではギドン・クレメル、ユリ・バシュメット、ボザールトリオと共演。2011年には、ピアノのキット・アムストロング、チェロのエイドリアン・ブレンデルとピアノトリオを結成した。今後の予定と

しては、ベートヴェンのピアノとヴァイオリンのためのソナタ、ハイドンのピアノ三重奏曲などがある。

ピロフは、ハノーファー音楽演劇大で職にも就いており、ヨーロッパ、アジア、アメリカ合衆国でマスタークラスを定期的に持っている。2005年には、ジャズギタリストのヨハン・ヴァイスとともに、「MBF(Musik braucht Freunde)基金」を設立し、ハノーファー音楽演劇大で100人を超える生徒たちの費用を支えてきている。また、ピロフは2013年からロンドンの英王立音楽院にも客演教授として招かれている。

ピロフが使用している器は、ガダニニによる1745年製”ex Flesch”である。